

説法師と弁才の研究

——大乘經典の創作への一視点——

中 川 晃

目次

1. はじめに
2. 四無礙解における弁才 (pratibhāna)
 - 2.1. パーリ文献における弁無礙解
 - 2.2. 北伝アビダルマ文献における弁無礙解
 - 2.3. 大乘仏教文献における弁無礙解
3. ひらめき (prati-bhā) による説法
 - 3.1. 第一の prati-bhā/paṭi-bhā 構造
 - 3.2. 第二の prati-bhā/paṭi-bhā 構造
 - 3.3. prati-bhā/paṭi-bhā 構造に見られる大乘への展開
4. 結論

1. はじめに

静谷正雄氏による研究以降、大乘經典に登場する説法師が經典制作に携わっていた可能性はしばしば言及されてきた。dharmabhāṇaka と呼ばれる説法師はその名の通り「法」を説く者であり、新しい思想が発展・伝播する際に必要不可欠な存在であったことは間違いない。しかし彼らがそれだけの役割に留まらず、經典制作にも関与したと推測される理由は、この語が大乘以前の經典においては（わずかな例外を除き）確認されていないためである。また大乘以前の文献では dharmakathika (Pāli; dhammakathika) という語が説法師を意味するものとして用いられており、反対に大乘經典における用例は極めて少ない。つまり大乘經典を制作した者たちには何かしらの意図が有り、それらの言葉を区別したと考えられるのである。その使い分けについて言及する論考は多く見られるが、その中でもそれらの言葉の用例を体系的に整理した西村実則氏による研究は非常に有益なものである^②。しかしながら極めて客観的なその研究をしても、その用例からは dharmabhāṇaka が大乘を制作したという直接的な手がかりは見られないと結論されている^③。

そこで本論は説法師の説法における能力という側面に注目し、大乘仏典において新たに dharmabhāṇaka という語が用いられた背景について考察したい。dharmakathika と dharmabhāṇaka に共通して描かれる能力にはいくつかのものがあるが、ここでは伊原照蓮 [1974] と グレアム・マックイーン [1981&82] に示唆を受け、‘pratibhāna’ (弁才) や ‘prati-bhā’ (ひらめき) という言葉を取りあげる。その二者の研究の目的は全く異なるものであるが、それぞれの考察する「四無礙解における pratibhāna の意味するもの」と「prati-bhā によって明らかにされる説法の内容」の変遷は dharmabhāṇaka の登場と重なる部分が見られるためである。以下からは両者の研究をふまえた上で再検討し、そこから得られた手がかりをもとに dharmabhāṇaka という言葉が用いられた理由についての考察をおこなう。

2. 四無礙解における弁才 (pratibhāna)

pratibhāna (Pāli: paṭibhāna) という語は四無礙解のひとつとして表現されることでよく知られ、主に「弁才」「能弁」などと漢訳される言葉である^④。語ることを意味する「弁」が能力的な意味を表す「才」や「能」をとまなうので、文字通りに理解をすれば「語りの才能」となるが、伊原氏は辞書に示された意味を分類し、この言葉の解釈について2通りの可能性を主張した^⑤。1つ目の解釈は、その語根を√bhaṇ と理解し、単に「話す」「語る」などのように発話を意味する場合。そしてもう1つの解釈は、語根√bhā が接頭辞の‘prati-’をとまなっていると理解し、「直感知」を意味する場合である。つまり伊原氏の主張が正しいとすれば、pratibhāna と表現される語には全く別の2語が想定されていた可能性があるということになる。そこで伊原氏は四無礙解の定義の変遷を辿ることで自説の立証を試みているが、本論もその方法に則って pratibhāna の意味合いについて考察する。

2.1. パーリ文献における弁無礙解

四無礙解とは法 (dharma-pratisaṃvid)・義 (artha-^⑥)・詞 (nirukti-^⑥)・弁 (pratibhāna-^⑥) の四つに対する無礙解であり、無礙解は pratisaṃvid (Pāli: paṭisaṃbhida) と表記され、言葉の成り立ちには諸説あるものの、一般的には「分析、特別な知識」を意味する^⑥。しかしながら最初期の用例にはその四つ無礙解が具体的に何を意味するか明らかにされていない。例えば『増支部』(Aṅguttara-Nikāya) の一節ではサーリプッタが比丘たちに無礙解について以下のように話しかける。

【資料1、『増支部』第4集-18故思品、173経】

具寿者よ、私は、具足戒を受けた半月後、[教えの] 区分や文により、義無礙解を体得し

た。私は、それを様々な方法によって説き、説示し、知らせめ、施設し、設定し、分別し、明らかにする。しかし、何か疑惑や当惑のある者は、私に質問でもって「尋ねなさい」。私は解説をもって「します」。私たちの教法について熟達している私たちの教師が、面前^⑦にいる「のだから」。

サーリプッタはこの後にも法・詞・弁の無礙解に関しても全く同様の発言を繰り返すが、その後には四無礙解に関する説明はなされず、ここでは個別の無礙解がどのような能力であるかは明かされていない。『増支部』の他の箇所や『パーリ律』を見ても、その具体的な内容はやはり明らかにされないが、「四無礙解を具足した論師 (vādi) は意味と語が尽きない」というような表現はところどころ見られ、それが「語り」に関する能力であることが分かる。

四無礙解の定義と言える内容は『ミリンダパンハー』(Milindapañha)において初めて言及されるが、その直前部には以下のような一節で、四無礙解を得ることが説法の自信に繋がるという描写がなされている。

【資料2、『ミリンダパンハー』第2編別章「推量に関する問い」】

大王よ、世尊の無礙解の宝石とはなんであるか？ 実には大王よ、四無礙解、[つまり] 義無礙解・法無礙解・詞無礙解・弁無礙解である。大王よ、これら四無礙解の宝石でもって飾られた比丘が、もしくは王族の衆会に、もしくは婆羅門の衆会に、もしくは家主の衆会に、もしくは沙門の衆会に、[近づいて来ても] 自信を持って近づき、当惑せず、恐れず、動揺せず、畏怖せず、身の毛のよだつことなく、衆会に近づいて行く^⑩。

そしてこの一節に続く箇所では個別の無礙解がどのようなものであるかが明らかにされる。そこでは義は「理由・原因・道理」を、法は「不死・無為・涅槃・空・無差別相・無願・不動」を、詞は「言語・語句・連声・子音・抑揚・音節・母音・概念・慣用語」を、弁は「譬喩・特相・作用」を意味すると説明される^⑪。つまりこの場合には、詞無礙解の言語的な分析の後、弁無礙解によって法が説かれると理解できる。

このような四無礙解の具体的な内容は主にアビダルマ論書で解説されていくことになるが、その前段階的なパーリ文献である『大義釈』(Mahāniddesa) や『無礙解道』(Paṭisambhidāmagga) にもそのことが説明されている。例えば『大義釈』には、『スッタニパータ』(Suttanipāta) 第4章第853偈の「諸の快いものに溺れず、また過度の慢心に関わらず、そして穏やかで、弁才あり、妄信することなく、嫌うこともない。」という一節の註釈として、四無礙解が以下のように説明される。

【資料3、『大義釈』第10章「死前経についての釈示」】

「証得に関する弁才のある者^⑬」とは、どのような者であるか。ここで、ある者が、四念処、四正勤、四神足、五根、五力、七覚支、八正道、四沙門果、四無礙解、六神通を証得した。彼は、義を知り、法を知り、詞を知り、義が知られると義が明らかになり、法が知られると法が明らかになり、詞が知られると詞が明らかになる。これら三つに関する智慧が弁無礙解である。[そして]この弁無礙解を具え、具備し、近づき、近接し、具足し、完具した。彼が「弁才のある者」^⑭と [呼ばれる]。

つまりこの記述によれば、義・法・詞の三無礙解についての智慧が弁無礙解であると理解される。また『無礙解道』にも同様の説明がなされており、そこでは法とは「五根・五力・七覚支・八聖道」であり、義はそれらに対応する「二十五法の作用」、また詞は法と義のそれぞれに対応する「文型と言語と話法」、そして最後の弁は前三無礙解に対応する「智慧」であるとされる^⑮。さらに伊原氏によると、『分別論』(Vibhaṅga) 第15章では、四無礙解に関する7種類の定義が列挙される中、その全てにおいて弁無礙解は「もろもろの智に対する智が paṭibhānapaṭisambhidā である (nāṇesu nāṇaṃ paṭibhānapaṭisambhidā)」と示しているという。したがって、ここまでに確認したパーリ文献を見る限りでは、『ミリンダパンハー』を除き、paṭibhāna は主に「智慧」として解釈されていたようである。

2.2. 北伝アビダルマ文献における弁無礙解

続いては北伝のアビダルマ論書における定義を確認する。そこで再び伊原氏の研究を参照すると、^⑯『俱舍論』(Abhidharmakośabhāṣya) における以下の一節が重要な記述としてとりあげられている。

【資料4、『俱舍論』智品、第7章第38偈 cd 句および世親釈】

第四 [の無礙解] は、理に応じて支障なく [語られる] ものと、道に自在であることとにおいてある。(7.38cd.)

「不退転の智慧である」と続く。理に応じて支障なく語ることにおける、および三昧の自在力が顕になることにおける、不退転の智慧が弁無礙解である^⑰。

伊原氏は特に下線部の「理に応じて支障なく語るもの」(yuktamuktābhilāpitā) が pratibhāna を「語る」と解釈する場合に、そして「顕になる」(saṃprakhyāna) は「直観知」と解釈する場合にそれぞれ対応すると主張する^⑱。つまりパーリ仏典においては「智慧」とだけ説明されて

いたものが、より具体的に「語る」と「顕になる」の2つの意味に分けて解釈されていると見るのである。そこでさらに、伊原氏が例に挙げた『俱舍論』以外の梵文アビダルマ論書を確認すると、『アビダルマ・ディーパ』(*Abhidharmadīpa*)は弁無礙解について「法と義と詞における禪定・解脱・三昧・定の自在力が顕になるとき、不退転の智慧であるもの、それは弁無礙解である²⁰」と定義しており、『俱舍論』で見られたような「理に応じて支障なく語るもの」と解釈する一文は見られない。しかし三昧による顕現という表現は『俱舍論』で見たものとほぼ同義であり、「語る」ことは自明のものとして省略されたのであろう。また勝部隆敏氏によれば、²¹先に見た『俱舍論』の一節は『品類足論』の見解を踏襲したものでもあり、『阿毘曇甘露味論』『大毘婆沙論』『雜阿毘曇心論』『順正理論』『顯宗論』などの漢訳アビダルマ論書に定義される四無礙解の記述も上述した論書のもとの概ね一致するため、伊原氏の主張する如く北伝系の理解では *pratibhāna* は「語る」と「直観知」の両方として考えられていたと言える。さらにその場合の「直感知」の基盤として三昧が想定されていることも、続く大乘仏教での思想的な展開に関連しているという点において非常に重要である。

2.3. 大乘仏教文献における弁無礙解

最後に大乘文献における定義を確認する。大乘以前から見られたような四無礙解に関する説明は『大乘莊嚴經論』(*Mahāyānasūtrālaṃkāra*)に認められる。以下にその一節を引用する。

【資料5、『大乘莊嚴經論』覺分品、第18章第34偈および世親釈】

菩薩たちにとって、四無礙解は比類のないものである。同義語に、特相に、言葉に、知に関する智慧であるから、それらは「比類のないものと」言われる。

第一は同義語に関する智慧であり、一々の意味についてあらん限りの名称の同義語のことである。第二は特相に関する「智慧であり」、ある対象についてのその名称のことである。第三は言葉に関する「智慧であり」、各地方において話される言葉のことである。第四は知に関する「智慧であり」、自らの弁才のことである。これが無礙解の特相である。²²

ここでの弁無礙解はパーリ仏典で見たように知の智慧として解釈されていることが分かるが、それと同時に「自らの弁才のこと」(*svayaṃ ... pratibhānam*)とも記されており、それは自らに顕になったものを語ることを意味しているようである。その裏付けとして『菩薩地』(*Bodhisattvabhūmi*)には以下のように示されている。

【資料6、『菩薩地』住品】

【問】 そのうち、菩薩たちにとって「無礙解住」とはなにか？

【答】 それは同じよく浄化された、動揺のない智慧と三昧を基盤とし、大いなる慧の広大さを獲得した者が、他の者たちに法を説示することの無上さに着手し、諸法の同義語と意味と語義解釈と分類とを分析する住まいである。²³

ここでははっきりと智慧と三昧を基盤とした者が説法を始めると言われており、先に見た『大乘莊嚴經論』が『菩薩地』の発展したものであることを踏まえると、「自らの弁才のこと」という表現が三昧による智慧の顕現に関係することは明らかである。つまりこれらの理解は先に見た北伝部派の弁無礙解に関する解釈の流れをくんだものであると言えよう。

以上のことを要約すると、その弁無礙解の定義は最初期の用例から大乘仏教へかけて変容したことが分かった。パーリ文献においては弁無礙解によって語することは単に「智慧」とされていたが、北伝アビダルマ論書にはその智慧が三昧の自在力によって「顕になる」ことであると具体的に説明されている。また大乘仏教においてもその解釈が引き続き採用されることとなった。したがって部派のある段階以降における pratibhāna には、伊原氏の言葉を借りるならば「直感知」という意味合いが含まれており、パーリ文献の dhammakathika に関して言及される paṭibhāna と大乘仏典の dharmabhāṇaka に関して言及される pratibhāna という一見同様とされていた能力にも差異があると考えられるのである。dharmabhāṇaka が三昧の自在力によって智慧を顕にさせることについては次章でさらなる検討をおこなう。

3. ひらめき (prati-bhā) による説法

説法師の弁才という能力の前提に「顕になる」ことが加わったことに関しては、pratibhāna の動詞形に興味深い用例が認められる。前章で述べたように pratibhāna を三昧によって智慧が「顕になる」こと、つまり「直感知」と解釈する場合、その動詞は prati-bhā (Pali: paṭi-bhā) という基本形で表される。実際には pratibhāti, pratibhātu というように語尾変化して使われ、それらを辞書で確認すると「ひらめく (顕になる)」「明らかになる」「思いが起こる」²⁴といった意味が記載されている。「思いが起こる」という場合にはある感情がその者に湧き上がるようなイメージであり、その一例としては「(それが) 私に恐怖をひきおこす」²⁵という表現や、「その死から仕事への思いが起こらなくなり、食事への思いも起こらなくなりました」²⁶といったものがあげられる。また、「明らかになる」と訳される場合の実例としては、ある者が賢者 (釈尊や高名な弟子など) に対して「実になにとぞ尊師よ、世尊はこの所説の意味を明らかにしてください」²⁷と依頼するような形がよく見られる²⁸。しかしながら本章で問題にするの

は前章で見た「直感知」という解釈に近い「ひらめく（顕になる）」という意味合いとしての用例であり、これこそが大乘經典における説法形式の変容に大きな関わりを持つと考えられるのである。

prati-bhā なる動詞形は、古くからインド哲学における重要な語として認識されていたが、⁽²⁹⁾ 仏教文献においては歴史的に重要視されたような記述は見られなかった。しかし近年ではその重要性を指摘する研究者たちが現れ、とりわけマックイーン氏が新たな仏説創作の背景にせまる論考において提唱した‘inspired speech’という概念はたいへん示唆的である。その論考で指摘される通り、仏滅後にも関わらず阿含やニカーヤが編纂された段階から「仏説」と言われる教えは増補を繰り返してきた。そのような教えが示される大半の説法の前後には、何らかのかたちで釈尊によって説法が承認されるという表現形式が採られているが、それ以外の場合の根拠とされるのが prati-bhā、つまりは「ひらめきによる語り（inspired speech）」であるという。⁽³¹⁾ さらにマックイーン氏はその形式を‘prati-bhā construction’（以下「prati-bhā/paṭi-bhā 構造」）と呼び2つの場合に分類する。⁽³²⁾

1つ目の構造は、主に釈尊から「ひらめきあれ」と言われたことによって教義を説き始めるというものである。この場合は大半の形式と同様にその説法の後に釈尊から承認を受ける場合が多く、「ひらめき」と呼ぶよりもむしろ釈尊の代弁をおこなっているようでもある。

2つ目の構造ではある者が「ひらめきました」と述べてからまったくの自発的なひらめきによる話を始めるというものである。マックイーン氏は最終的にこれらの構造が『八千頌般若経』や『法華経』においても応用されていることに注目し、大乘經典の制作について論じているが、⁽³³⁾ ここでは前章での考察をふまえて prati-bhā/paṭi-bhā 構造が初期經典から大乘にいたるまでにどのような変遷をしたか検討していく。

3.1. 第一の prati-bhā/paṭi-bhā 構造

そこでまずはマックイーン氏が1つ目の prati-bhā/paṭi-bhā 構造の典型例として引用した『長部』(Dīgha-Nikāya)「等誦経」での一節を確認する。そこでは夜更けまで法を説き示していた釈尊が、それでも法を聴き足らない比丘たちの様子を見て、「サーリプッタよ、僧団の比丘たちは昏沈と眠気を離れた状態にある。比丘たちへ説法をひらめくように (paṭibhātu)。わたしは背中が痛むので、それ (背中) を伸ばします。」⁽³⁴⁾ と述べ、サーリプッタに説法を委託する様子が描かれている。ここでサーリプッタによって説かれる教えは独自のものではなく、日頃から聴き学んでいる釈尊の教えの代弁に近いものである。

続いて他の類例を見てみると、『相應部』(Samyutta-Nikāya)「天子相應」の一節には次のような場面が描かれている。そこではカッサパが未だ説明されていない教えがあることを釈尊に

伝えると、釈尊は「それではカッサパよ、実にそれはここで、ひらめきなさい (paṭibhātū)³⁵。」と告げる。それにしたがってカッサパが間違いの無い教説を述べると、釈尊はそれを正しいと説法として認めるが、ここで説かれる法もやはり特別なものではなく、カッサパの日頃の学びの智慧によってもたらされた説法である。³⁶

また少し様子の異なる類例としては『パーリ律』の一節がある。そこでは釈尊がソーナという比丘に「比丘よ、説示される法をひらめきなさい (paṭibhātū)³⁷。」と告げ、ソーナは『スッタ・ニパータ』『八頌品』(aṭṭhakavagga) を読誦する。それに対して釈尊は「比丘よ、善い哉善い哉。比丘よ、おまえは八頌品をよく学び、よく作意し、よく思惟している」と言って喜ぶことから、これもやはりソーナ比丘の日頃の学びによる智慧が示されていると言えるだろう。

次に正反対の例を確認すると、『中部』(Majjhima-Nikāya) の一節においては在家信者のパンチャンカンガのひらめきが十大弟子であるアヌルッダによって間違いであると指摘される様子が以下のように描かれている。

【資料7、『中部』第127「アヌルッダ経」】

(アヌルッダ)「それでは、家主よ、実にそれについてここで明らかにしなさい (ひらめきあれ)。これによって、あなたにとって戯論がないようになるであろう。」

(パンチャンカンガ)「尊師よ、実は私はこのように考えます。『この無量の心解脱と大いなる心解脱、これらの教法は同一であり、字句のみが異なっている。』と。」

(アヌルッダ)「家主よ、この無量の心解脱と大いなる心解脱、これらの教法は種々あり、種々の字句がある。³⁸」

ここで間違いを語ったパンチャンカンガは在家信者であることから、この者が先に見た比丘の場合とは異なり、正しく明らかにする智慧を有していなかったと考えるのが妥当である。このように釈尊が「ひらめきあれ」と促すことによる prati-bhā/paṭi-bhā 構造は、マックイーンが「智慧の仏教型」と言ったように³⁹、説法者の智慧としての弁才の有無によりその答えが決まっている。

3.2. 第二の prati-bhā/paṭi-bhā 構造

ここからはもう一方の prati-bhā/paṭi-bhā 構造、つまりある者に唐突に prati-bhā が生ずる形式について検討するが、まずはその典型としてマックイーン氏が例に挙げた『相応部』「ヴァンギーサ相応」を確認する。この話の中心となるヴァンギーサは元々吟遊詩人であったと言われ、釈尊から「弁才第一」⁴⁰とまで呼ばれた仏弟子である。ここではヴァンギーサが「世尊よ、

私にひらめきがあります。善逝よ、私にひらめきがあります」と述べ、釈尊が「ヴァンギーサよ、それをひらめきなさい（顕にしなさい）」と返答することでその説法が始まる。^{④①}ヴァンギーサは朗々と釈尊を讃嘆する詩句を唄い始めるが、それは単なる教えの暗唱でも釈尊の教説の代弁でもない。あくまでも即興的なこの語りの形式は、その後も対象を釈尊から仏弟子へと変えることで計6度繰り返される。同一人物がひらめきによって何度も語るような記述は他に例が無く、ヴァンギーサが弁才第一と言われた由縁がここで強調されているようである。まさに吟遊詩人という出自故に彼が即興的な語りにおいて優れていたと考えられるが、その裏づけとなる表現は同章の後半部における釈尊とヴァンギーサの対話において確認される。

【資料8、『相応部』第8 ヴァンギーサ相応、8 経「千人以上」】

「ヴァンギーサよ、これらの偈頌は以前から考えていたものか。即座におまえにひらめいたものか」と。「世尊よ、これらの偈頌は以前から考えていたものではありません。そこで、即座に私にひらめいたものです」^{④②}と。

ここでは何度も自らのひらめきによって詩頌を語るヴァンギーサに対し、釈尊が思わずどのようにしてそのような話を思いつくのかと驚き尋ねているようである。さらにヴァンギーサの「即座に私にひらめいたのです」(thānaso va maṃ paṭibhanti ti)^{④③}という返答を受けて、何度も即興的な語りを認めていることから、釈尊はその能力を前向きに受け取っていたに違いない。この prati-bhā/paṭi-bhā 構造の他の例に目を向けると、ヴァンギーサ同様に詩頌を説く者の場合が同じく『相応部』「コーサラ相応」に認められる。そこでは在家信者のチャンダナンガリカが「世尊よ、私にひらめきがあります。善逝よ、私にひらめきがあります (paṭibhāti)」^{④④}と述べた後、釈尊を讃嘆する詩頌を唱えるという話が描かれている^{④⑤}。この例からは在家者であろうと比丘と同じようにひらめくことが可能であることが知られる。

ここまでに見てきた用例は詩頌をひらめくものであったが、それ以外の場合も『中部』第35「小サッチャカ経」の一節におけるジャイナ教徒のサッチャカ（アग्ギヴェッサナ）と釈尊の間答的一幕のなかで描かれている。そこではサッチャカが「君、ゴータマよ、わたしにある譬喩がひらめきました (paṭibhāti)」^{④⑥}と述べた後に、自身の考えを説き始める。しかしそこで説かれた考えは是認されず、それどころか最終的には釈尊によって論破されてしまう。さらに続く箇所ではドゥンムカという者が同様に譬喩をひらめき、サッチャカが釈尊に論争で破れたことを譬えによって説き示している^{④⑦}。ここで説示されるひらめきも単なる譬喩や誤った教えであり、したがってパーリ文献における2つ目の prati-bhā/paṭi-bhā 構造を伴った唐突に生ずる純粋なひらめきは釈尊を讃嘆する詩句や譬喩表現に限られていたことが分かった。

3.3. prati-bhā/paṭi-bhā 構造に見られる大乘への展開

しかしそのような2つの prati-bhā/paṭi-bhā 構造による語りの例は前章で見た弁無礙解の解釈と同様に、北伝部派において変化している。例えば、十地思想の原型を説く『大事』(Mahāvastu) ではパーリ文献における1つ目の prati-bhā/paṭi-bhā 構造が発展した形式が用いられているのである。その文脈では釈尊が自身と如来の威神力(anubhāva)について語っているが、そこでヴァギーシャと呼ばれる者に対して、「ヴァギーシャよ、過去世において如来と一緒にであったことについて、お前にひらめきあれ⁴⁸(pratibhātu)」と告げる。パーリ文献において類似の形式で語られる内容は智慧によるものであったが、ここでのひらめきは如来の過去世についてであり、学びから得られるものではない。続いて語られる説法は如来の威神力によってひきおこされたものと考えられるが、そのような語りが認められたことは後の大乘經典における説法師の語りにも共通するという点で重要である。

大乘經典における prati-bhā/paṭi-bhā 構造の用例として、マックイーン氏が最も注目した『八千頌般若経』における記述を考察する。『八千頌般若経』(Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā) の冒頭部における以下のようなやり取りから始まる。

【資料9、『八千頌般若経』第1章】

そこで、世尊は上座のスプーティ長老に語りかけた。「スプーティよ、菩薩大士たちはどのように般若波羅蜜に向かって出ていくべきであろうか。そのような菩薩大士たちの般若波羅蜜について、お前にひらめくように⁴⁹(pratibhātu)。」

ここでの形式は先の『大事』の例と同様に「ひらめきあれ」という1つ目の prati-bhā/paṭi-bhā 構造をとるが、『大事』においては如来の過去世の話にとどまっていた説法の内容が『八千頌般若経』の根本の思想である般若波羅蜜について拡張されている。さらに釈尊のその言葉を聞いたシャーリプトラは次のように思案する。

【資料10、『八千頌般若経』第1章】

いったい、上座のスプーティ長老は自分の智慧とひらめき(弁才: pratibhāna)の力に依拠し、自分の智慧とひらめき(弁才: pratibhāna)の力に助けられて、菩薩大士たちの般若波羅蜜を説示する⁵⁰のか、それとも仏の威神力の助けによって「説示する⁵⁰」のか。」

ここでのシャーリプトラは純粋なひらめきによって般若波羅蜜という新たな教えを語ることが本当に可能であるのかと疑っているようでもある。この役回りは当時的大乗教徒ではない声

聞の者を反映させたものだろう。さらにそのようなシャーリプトラの考えを仏の威神力 (buddhānubhāva) によって察したスプーティは次のように答える。

【資料11, 『八千頌般若經』第1章】

シャーリプトラ長老よ、何であれ世尊の弟子たちが話し、説き、述べ、語り、説明し、明らかにすることは、すべて如来の雄々しい行為であると知らねばならない。それはなぜか。如来が説法をする時、その説法を学ぶ者たちは、法性を直証し、憶持するからである。その法性を直証し、憶持したうえで、何かを話し、何かを説き、何かを述べ、何かを語り、何かを説明し、何かを明らかにするが、それらすべてはかの法性に相反しない。シャーリプトラ長老よ、善男子たちがかの法性を説くとき、法性に相反しないのは、それが如来の説法から自然に流れ出たものだからである。^{⑤①}

つまり、スプーティが仏の威神力によってひらめいて語り出したことは法性に反することのない (dharmaṭayā na virodhayanti)、如来の説法に等しいものとして肯定されている。この発言を広い視点で見ると、般若波羅蜜という新たな教えが正当な仏説であると主張するこの經典の制作者の意図が伺い知れる。また釈尊が「上座のスプーティはいまだに般若波羅蜜さえ見出していない」と述べていることや、彼が多くの事柄を認識していないと明かされることから、その説法が威神力の助けによる完全なひらめきであることを意味している。つまりパーリ文献における1つ目の prati-bhā/paṭi-bhā 構造では智慧による説法が促されていたのに対し、ここでは如来の威神力によって、言うなれば「霊的なひらめき」がひきおこされ、如来の説法と等流である新たな教えが説かれることとなったのである。またこの用例は先に見た『大事』の流れをくんだものと考えられるが、過去・現在・未来仏を説く部派では如来の過去世に限られていた説法の内容が、十方諸仏を説く大乘經典においては如来の説法と同質な新たな仏説にまで拡大されているのである。したがってこの經典における prati-bhā/paṭi-bhā 構造は説法の表現形式における大きな転換を示している。^{⑤③}

さらに他の初期大乘經典に目を向けると、『法華經』(Saddharma-puṇḍarīka) において2つ目の prati-bhā/paṭi-bhā 構造が認められる。以下の一節は、シャーリプトラの授記を聞いた後にスプーティやマハーカッサパなどの仏弟子たちによって語られる。

【資料12, 『法華經』信解品、第4章】

世尊よ、私たちは、阿耨多羅三藐三菩提の授記が、声聞たちにもあるということを世尊のそばで聞き、驚きを得て、大いなる利益を得ました。世尊よ、いままさに思いがけずに、こ

のような過去に聞いたこともない、この如來の言葉を聞き、大いなる宝を得ました。世尊よ、無量の宝を獲得しました。世尊よ、私たちは求めることもなく、探求することもなく、考えることもなく、望むこともなく、世尊よ、このように大いなる宝を獲得したのです。世尊よ、私たちにひらめきがあります (pratibhāti)。善逝よ、私たちにひらめき⁵⁴あります。

ここでこの発言をした者（おそらくマハーカッサパ）がひらめいたことは譬喩であり、この直後よりその説明がなされる。そしてその譬喩は彼がたったいま釈尊から聞いた『法華經』の教法に関するものである。譬喩のひらめきと言えば、先で見たサッチャカのことを思い出されるが、ここで語られる譬喩は如來の教えを信解したうえでひきおこされたものであり、サッチャカによるものとは若干であるが性質が異なる。さらにそれはパーリ文献で見られたような詩頌の形式ではなく、実に1章の大半を費やすほどの散文形式で語られている。この prati-bhā/paṭi-bhā 構造は仏の威神力によってひきおこされたとは書かれていないが、「如來の言葉を聞く」という表現は『八千頌般若經』のものと類似しており、十方諸仏が説かれ如來の概念が拡大した大乘經典の特徴が反映されている。

4. 結論

ここでは上記の事柄を要約し結論及び私見を述べる。本論第2章では「四無礙解」における弁無礙解の定義変遷を辿ることで、パーリ仏典においてはただ「智慧」と言われていた prati-bhāna が、北伝アビダルマ文献においては「語る」と「直観知（ひらめき）」の2つに分けて解釈され、大乘でもそれをふまえた理解をしていたことが明らかとなった。そこで第3章では「直観知（ひらめき）」と解釈する場合の動詞形である prati-bhā に注目し、ひらめきによる説法の構造の変遷を確認した。パーリ文献に見られる prati-bhā/paṭi-bhā 構造による語りは、自発的にひらめく場合においてもせいぜい釈尊を讃嘆する程度のものであり、新たな教説が生み出される様な素地は見出されなかったが、大衆部所伝の『大事』では同様のひらめきによる語りが拡大され、如來の威神力の助けによって過去世の出来事を語るという表現が認められた。これは大乘においてさらに発展し、『八千頌般若經』では威神力の助けを借りた「靈的なひらめき」による説法に繋がっていた。また『法華經』においても、大乘以前には見られなかったひらめきによる譬喩の語りが描かれており、初期大乘の段階ではひらめきによる説法の意味合いが大きく格上げされているのである。つまり四無礙解及び弁無礙解の定義が部派のある段階において拡張され、三昧によって智慧が「顕になる」ことが想定されたことに連動して prati-bhā/paṭi-bhā 構造によるひらめきの意味合いも変容したと思われる。如來の力を借りるという

表現が用いられているが、それは大乘の成立にかけた如来の概念の拡大化にともなうものであり、実際には『八千頌般若経』の中で説法師であるダルモードガタ菩薩が三昧を終えてから新たな教え（般若波羅蜜）を説き出すが如く、三昧によって智慧が「顕になる」ことこそが「霊的なひらめき」である。一方の『法華経』がその威神力という表現を用いないのは、三昧の自在力に対するスタンスの違いに関係があるのではないか。

またそのように部派のある段階から pratibhāna という言葉が智慧による語りとはひらめきという2つの意味を内包するものとして考えられてきたのであれば、この言葉を発話する者にとって元の語根である√bhā, 及び√bhaṇ の区別は徐々に意識されなくなったであろう。したがって、prati-bhā することによって新たな教えの説法が描かれる大乘経典において dharmabhāṇaka という言葉が採用された背景には、同じ√bhaṇ を語根に持つ pratibhāna という言葉があり、その場合には説法師が仏の自在力と三昧の自在力に依拠した「霊的なひらめき」によって説法をおこなっていた事実が反映されていると考えられるのである。

略号及びテキスト

- [Abhidh-d] *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti*, ed. by P.S. Jaini, Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, Panta, 1959
- [AKBh] *Abhidharmakośa-bhāṣya of Vasubandhu*, ed. by P. Pradhan, Panta, 1967
- [AN] *Anguttara-Nikāya of the Sutta-Pitaka*, I~III, ed. by R. Morris & E. Hardy, Pali Text Society, Oxford, 1989/1995/1994 (reprinted)
- [Aṣṭa] *Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā*, ed. by P.L. Vaidya, The Mithila Institute, Darbhanga, 1960
- [BBh] *Bodhisattvabhūmi*, ed. by N. Dutt, K.P. Jayaswal Research Institute, Panta, 1966
- [DN] *Dīgha-Nikāya of the Sutta-Pitaka*, III, ed. by Rhys Davids, Pali Text Society, London, 1975 (reprinted)
- [Mil] *The Milindapañha*, ed. by V. Trenckner, Pali Text Society, Oxford, 1997 (reprinted)
- [MN] *Majjhima-Nikāya of the Sutta-Pitaka*, I~III, ed. by V. Trenckner and R. Chalmers, Pali Text Society, Oxford, 1993/1993/1994 (reprinted)
- [MNd] *Mahānidāsa*, ed. by L. de la Vallée Poussin and E.J. Thomas, Pali Text Society, Oxford, 2001 (reprinted)
- [MSA] *Mahāyānasūtrālamkāra*, ed. by Sylvain Lévi, Exposé de la doctrine du Grand Véhicule, Paris, 1907
- [Mvu] *Le Mahāvastu*, ed. by É. Senart, Meicho-Fukyū-Kai, Tokyo, 1977 (reprinted)
- [Paṭis] *The Paṭisambhidāmagga*, ed. by Arnold C. Taylor, Pali Text Society, London, 1979 (reprinted)
- [SN] *Samyutta-Nikāya of the Sutta-Pitaka*, I~III, ed. by Léon Feer, Pali Text Society, Lancaster, 2006/1994/1975
- [Sn] *Sutta Nipāta*, ed. by D. Andersen and H. Smith, Pali Text Society, Oxford, 1990 (reprinted)
- [SP] *Saddharmapuṇḍarikāsūtra*, ed. by P.L. Vaidya, The Mithila Institute, Darbhanga, 1960
- [T] 『大正新脩大藏經』大藏出版、1924-1932年。

- [Vibh] *The Vibhaṅga*, ed. by Rhys Davids, Pali Text Society, London, 1978 (reprinted)
 [Vin] *Vinaya-piṭakam*, I-, ed. by Hermann Oldenberg, Pali Text Society, Oxford, 1993 (reprinted)

テキスト翻訳参照資料

植木雅俊

- [2008] 『梵漢和対照 法華経』 岩波書店

梶山雄一

- [2001] 『大乘経典 2 八千頌般若経 I』 中央公論新社
 [2001] 『大乘経典 3 八千頌般若経 II』 中央公論新社

研究会編 (能仁正顕編集)

- [2009] 『『大乘荘嚴経論』 第 I 章の和訳と注解—大乘の確立—』 龍谷叢書 X X、自照社出版

櫻部建・小谷信千代・本庄良文

- [2004] 『俱舍論の原典研究—智品・定品—』 大蔵出版

長尾雅人

- [2009] 『『大乘荘嚴経論』 和訳と註解—長尾雅人研究ノート (3)—』 長尾文庫

平岡聡

- [2010] 『ブッダの大いなる物語：梵文『マハーヴァストゥ』全訳・下巻』 大蔵出版

三友健容

- [2007] 『アビダルマディーパの研究』 平楽寺書店

参考文献

Dayal, Har

- [1932] *The Bodhisattva Doctrine in Buddhist Sanskrit Literature*, Motilal Banarsidass (Delhi)

MacQueen, Graeme

- [1981] Inspired Speech In Early Mahāyāna Buddhism I, *Religion*, 11, pp.303-319
 [1982] Inspired Speech In Early Mahāyāna Buddhism II, *Religion*, 12, pp.49-65

伊原照蓮

- [1974] 「四無礙解について—弁無礙解の検討—」 『智山学報』 23/24 (38), pp.1-12

勝部隆敏

- [1979] 「説法と四無礙解」 『大正大学総合佛教研究所年報』 1, pp.115-132

上村勝彦

- [1996] 「詩的靈感 (pratibhā) について」 『インド思想と仏教文化：今西順吉教授還暦記念論集』, 59-72

静谷正雄

- [1954] 「法師について」 『印度学仏教学研究』 5, pp.131-132

下田正弘

- [1997] 『涅槃経の研究—大乘経典の研究手法試論』 春秋社
 [2011] 「経典を創出する—大乘世界の出現—」 『大乘仏教の誕生 / シリーズ大乘仏教』 2, pp.37-71

西村実則

- [1991] 「大衆部・説出世部における説法師」 『仏教論叢』 35, pp.13-18
 [1992] 「説法師一部派と大乘との対比—」 『般若波羅蜜多思想論集：真野龍海博士頌寿記念論文』

- 集』, pp.389-426
- 広瀬智一
[1974]「ヴァイバーシカ学派と大乘との交渉—特に Buddhavacana をめぐって—」『東北福祉大学論叢』13, pp.51-72
- 藤田祥道
[1998]「仏語の定義をめぐる考察」『インド学チベット学研究』3, pp.1-51
- 本庄良文
[1989]「阿毘達磨仏説論と大乘仏説論—法性、隠没経、密意—」『印度学仏教学研究』75, pp.410-405
- 村上真完
[1998]「大乘経典の創作 (sūtrāntarābhinihāra, 能演諸経, 善説諸経)」『論集』25, pp.1-20

註

- ① 静谷氏は1954年に発表した「法師について」という題目の小論文において、『法華経』に確認される dharmakathika と dharmabhāṇaka の使い分けに着目した。さらに dharmabhāṇaka に賛辞や権威が付されていることから「dharmabhāṇaka が法華のみならず、初期大乘経典の殆どすべての製作、宣傳に主導的な役割をつとめたものと推測する。諸種の大乗経典は、いわば法師の伝道文学であり、大乘運動は法師によって展開されてきたともいえよう」と提起している。(静谷[1954], pp.131-132.)
- ② 詳細は西村[1991], [1992]を参照のこと。
- ③ 下田正弘氏は、下田[1997]においては本論が注目する Macqueen [1981&82]を参照し説法師と大乘興隆の関係性に注目していたが、現在では大乘経典の創作に dharmabhāṇaka は関与していないと述べている。(下田[2011], p.53.)
- ④ 荻原雲来『漢訳対照 梵和大辞典』(p.837.)には「明白なこと、着想のすばらしさ、沈着、理解、能弁なこと」の意が記されており、漢訳語としては「弁(辯)、弁才、巧辯、辯説、辞辯、辯了、能弁説者、説、所説、能説法者、楽説、言詞、言語」などがあげられている。
- ⑤ 伊原[1974], p.2.
- ⑥ Monier-Williams, “A Sanskrit-English Dictionary” には ‘analytical science’ (p.672)、Edgerton, “Buddhisat Hybrid Sanskrit Dictionary” には ‘special knowledge’ (p.370) とある。また “BHS” の同ページに ‘Pali paṭisambhidā, which is often, but questionably, assumed to be the original form’ と注記されているように、サンスクリットとパーリの語形が少々異なることから、どちらの形がもともとなったかについての議論がなされている。詳細は Dayal[1932], pp.260-263., 広瀬[1974], pp.59-60.などを参照のこと。
- ⑦ AN, II, p.160, ll.22-27: Addhamāsūpasampanna me āvuso atthapaṭisambhidā sacchikatā odhiso vyañjanaso / Tam ahaṃ anekapariyāyena ācikkhāmi desemi pakāsemi paññāpemi paṭṭhapemi vibhajāmi uttānikaromi / Yassa kho pana assa kaṅkhā vā vimati vā so maṃ pañhena-ahaṃ veyyākaraṇena sammukhībhūto no satthā yo no dhammānaṃ sukusalo /
『増一阿含経』四意断品、第9経、T2. 639a-b. に対応する。
- ⑧ AN, III, p.113, 120., Vin, V, p.197. など。
- ⑨ AN, II, p.139, ll.6-9: Ime kho bhikkhave cattāro vādī / Aṭṭhānaṃ etaṃ bhikkhave anavakāso yaṃ catuhi paṭisambhidāhi samannāgato atthato ca vyañjanato ca pariyādānaṃ gacchatīti /
- ⑩ Mil, p. 339, ll. 6-14: Katamaṃ mahārāja bhagavato paṭisambhidāratanāṃ / Catasso kho

mahārāja paṭisambhidāyo atthapaṭisambhidā dhammapaṭisambhidā niruttipaṭisambhidā paṭibhānapaṭisambhidā'ti / Imehi kho mahārāja catuhi paṭisambhidāratanehi samalankato bhikkhu yaṃ yaṃ parisam upasankamati, yadi khattiyaparisam yadi brāhmaṇaparisam yadi gahapatiparisam yadi samaṇaparisam, visārado upasankamati, amankubhūto abhīru acchambhī anutrāsī vigatalomahaṃso parisam upasankamati /.

- ⑪ *ibid*, p.339-340.
- ⑫ Sn. 853, p.167, ll.7-8: sātiesu anassāvī atimāne ca no yuto, saṃho ca paṭibhānavā, na saddho na virajjati /.
- ⑬ 「証得に関する～」とあるが、これはそもそも弁才には3種があると言われた中のひとつに関する説明であり、その他の2種としては聖典に関する弁才のある者 (pariyattipaṭibhānavā) と質問に関する弁才のある者 (paripucchāpaṭibhānavā) があげられている。
- ⑭ MNd, p.234, l.25-p.235, l.5: Katamo adhigamapaṭibhānavā / Idha ekaccassa adhigatā honti cattāro satipaṭṭhānā, cattāro sammappadhānā, cattāro iddhippādā, pañca indriyāni, pañca balāni, satta bojjhaṅgā, ariyo aṭṭhaṅgiko maggo, cattāri sāmāññaphalāni, catasso paṭisambhidā, cha abhiññā; tassa attho ñāto, dhammo ñāto, nirutti ñātā, atthe ñāte attho paṭibhāyati, dhamme ñāte dhammo paṭibhāyati, niruttiyā ñātāya nirutti paṭibhāyati; imesu tisu ñāṇaṃ paṭibhānapaṭisambhidā / Imāya paṭibhānapaṭisambhidāya upeto samupeto upagato samupagato upapanno samupapanno samannāgato hoti; so vuccati paṭibhānavā /
- ⑮ Paṭis, pp.88-91.
- ⑯ 伊原[1974], p.589.
- ⑰ *ibid*, p.588.
- ⑱ AKBh, p.418: caturthī yuktamuktābhilāpamārgavaśitvayoḥ //7.38cd
avivartyaṃ jñānam iti vartate / yuktamuktābhilāpitāyāṃ samādhivaśisaṃprakhyāne cāvivartyaṃ jñānaṃ pratibhānaśaṃvit /. 櫻部[2004], pp.154-155. 参照。
- ⑲ 伊原[1974], pp.588-589.
- ⑳ Abhidh-d, pp.393-394: dharmārthaniruktiṣu dhyānavimokṣasamādhisaṃpattivaśitvasaṃprakhyāne yad avivartyaṃ jñānaṃ sā pratibhānapratisaṃvit. 三友[2007], pp.744-745. 参照。
- ㉑ 勝部[1979], pp.116-117. 勝部氏は漢訳アビダルマ論書もふまえ、そこに記された四無礙解の定義を、法無礙解＝「能詮の法たる名・句・文身に対する不退智」、義無礙解＝「所詮の義・勝義に対する不退智」、詞無礙解＝「諸国の方言に対する不退智」、弁無礙解＝「理にかなない障礙のない言説と禪定における自在の顕現とに対する不退智」と分類し要約している。
- ㉒ MSA, pp.138, l.19-p.139, l.2:
asamā bodhisattvānāṃ catasraḥ pratisaṃvidāḥ /
paryāye lakṣaṇe vākye jñāne jñānāc ca tā matāḥ // 18.34.
prathamā paryāye jñānaṃ ekaikasyārthasya yāvanto nāma paryāyāḥ / dvitīyā lakṣaṇe yasyārthasya tannāma / tṛtīyā vākye pratyekaṃ janapadeṣu yā bhāṣāḥ / caturthā jñāne svayaṃ yat pratibhānaṃ / idaṃ pratisaṃvidāṃ lakṣaṇaṃ /.
- ㉓ BBh, p. 220, ll. 3-5: tatra katamo bodhisattvānāṃ pratisaṃvidvihāraḥ / yas tam eva supariśuddhaṃ niścalaṃ prajñāsamādhim niśritya mahāmātivaipulyaṃ anuprāptasya pareṣāṃ dharmasamākhyānānuttaryam ārabhya dharmāṇaṃ paryāyārthanirvacanaprabhedapracayavīhāraḥ /.
- ㉔ “Monier” (p.668.) には ‘to shine upon, to come in sight, present or offer one's self to’, ‘to

appear to the mind, flash upon the thoughts', 'become clear or manifest, occur to' などの意味が記されている。

- ②⑤ SN, I, p.203, l.29: taṃ bhayaṃ paṭibhāti maṃ.
- ②⑥ MN, II, p.106, ll.13-15: tassa kālakiriyāya n' eva kammantā paṭibhanti, na bhattaṃ paṭibhāti.
- ②⑦ SN, II, p.24, ll.14-15: Sādhū vata bhante Bhagavantaṃ yeva paṭibhātu etassa bhāsitaṃ attho.
また SN, II, p.198., SN, III, pp.2-6, 66. などにも同類の表現が認められる。
- ②⑧ MN, III, p.261. も同様である。
- ②⑨ その中でも 5 世紀頃の言語哲学者であるバルトリハリの考察はよく知られる。また言語哲学の領域のみならず、インドの古典詩論においても詩作的なひらめきを意味する prati-bhā という言葉は重要視され、議論をよんだという。詳細は上村[1996]を参照のこと。
- ③⑩ マックイーン氏以外にこのことを言及している研究には下田[1997], 村上[1998]があげられる。
- ③⑪ Macqueen [1981], pp.309-310. cf. 下田[1997], p.44.
- ③⑫ *ibid.* pp.310-315.
- ③⑬ マックイーン氏の研究ではそもそも論証が目的とはされておらず、あくまでも可能性を示唆するものである。したがって例として提示されたものは数例のみ（大乘にいたっては『八千頌般若経』のみ）であり完全なものではなく、その後の研究も見られない。
- ③⑭ DN, III, p. 209, ll. 16-18: Vigatathinamiddho kho Sāriputta bhikkhu-saṃgho, paṭibhātu taṃ Sāriputta bhikkhūnaṃ dhammi-kathā / Piṭṭhi me āgīlayati, taṃ ahaṃ āyamiṣṣāmi /.
- ③⑮ SN, I, p.46, l.12: Tena hi Kassapa taññev-etthā paṭibhātū.
- ③⑯ *ibid.* pp.155-156. にも同類の用例がある。
- ③⑰ Vin, I, p.196, l.34: paṭibhātu taṃ bhikkhu dhammo bhāsitaṃ.
- ③⑱ MN, III, pp. 146, ll. 3-10: Tena hi, gahapati, taṃ yeva ettha paṭibhātu, apaṇṇakaṃ te ito bhavissatīti / Mayhaṃ kho, bhante, evaṃ hoti: Yā cāyaṃ appamāṇā cetovimutti yā ca mahaggaṭā cetovimutti, ime dhammā ekaṭṭhā byañjanaṃ eva nānaṃ ti / Yā cāyaṃ, gahapati, appamāṇā cetovimutti yā ca mahaggaṭā cetovimutti, ime dhammā nānaṭṭhā ca eva nānābyañjanaṃ ca /. 『中阿含経』 長寿王品、第79「有勝天経」、T1. 550a. に対応する。
- ③⑲ この表現は下田[1997]の訳語を借用した。
- ④⑰ AN, I, p.24, l.21: paṭibhānavantānaṃ yadidaṃ Vaṅgīso.
- ④⑱ SN, I, p.189, ll.13-15: Paṭibhāti maṃ Bhagavā paṭibhāti maṃ Sugatā ti / , また Paṭibhātu taṃ Vaṅgīsaṃ ti Bhagavā avoca /.
- ④⑲ *ibid.* p.193, ll.3-6: Kinna te Vaṅgīsa imā gāthāyo pubbe parivattakā udāhu ṭhānaṃ va taṃ paṭibhanti ti / Na kho me bhante imā gāthāyo pubbe parivattakā atha kho ṭhānaṃ va maṃ paṭibhanti ti //. 『雜阿含経』 卷第四十五、第1219経、T2. 332c. に対応する。
- ④⑳ *ibid.* p.193.
- ④㉑ *ibid.* p.81, l.9: Paṭibhāti maṃ Bhagavā paṭibhāti maṃ Sugatāti.
- ④㉒ AN, III, p.239. にもピンギヤーニという比丘が釈尊を讃嘆する偈頌を説く様子が描かれている。
- ④㉓ MN, I, p.230, ll.10-11: Upamā maṃ bho Gotama paṭibhātīti.
- ④㉔ *ibid.* p.234.
- ④㉕ Mvu, p.267, ll.10-11: pratibhātu te vāgīsa tathāgatasya pūrvayogo.
- ④㉖ Aṣṭa, p.2, ll.1-3: tatra khalu bhagavān āyusmantāṃ subhūtiṃ sthāviramāṃ antrayate sma / pratibhātu te subhūte bodhisattvānaṃ mahāsattvānaṃ prajñāpāramitāṃ ārabhya yathā bodhisattvā mahāsattvāḥ prajñāpāramitā nirvāyur iti //.

- ⑤⑩ *ibid.*, p. 2, ll. 4-6: kim ayam āyusmān subhūtiḥ sthavira ātmīyena svakena prajñāpratibhānabalādhānena svakena prajñāpratibhānabalādhiṣṭhānena bodhisattvānām mahāsattvānām prajñāpāramitāmu padekṣyati utāho buddhānubhāveneti /.
- ⑤⑪ *ibid.*, p.2, l.8-p.3, l.2: yatkiṃcid āyusman śāriputra bhagavataḥ śrāvakā bhāṣante deśayanti upadiśanti udirayanti prakāśayanti samprakāśayanti, sa sarvas tathāgatasya puruṣakāro veditavyaḥ / tatkasya hetoḥ / yo hi tathāgatena dharmo deśitaḥ, tatra dharmadeśanāyām śikṣamāṇās te tām dharmatām śakṣātkurvanti dhārayanti, tām dharmatām śakṣātkṛtya dhārayitvā yad yad eva bhāṣante, yad yad eva deśayanti, yad yad eva upadiśanti, yad yad evodirayanti, yad yad eva prakāśayanti, yad yad eva samprakāśayanti, sarvaṃ taddharmatayā aviruddham / tathāgatadharmadeśanāyā eva āyusman śāriputra eṣa niṣyandaḥ yatte kulaputrā upadiśantas tām dharmatām dharmatayā na virodhayanti //. なお「法性に相反しない」という点は、仏説論と関係する。本庄良文[1989], 藤田祥道[1998], 研究会編[2009]参照。
- ⑤⑫ *ibid.*, p.225, ll.3-5: yadyad eva hi kauśika subhūteḥ sthavirasya pratibhāti, tattad eva kauśika śūnyatām ārabhya pratibhāti / tatkasya hetoḥ / subhūtir hi kauśika sthaviraḥ prajñāpāramitām api tāvan na samanupaśyati, nopalabhate, kutaḥ punar yaḥ prajñāpāramitāyām carati /.
- ⑤⑬ またこの経典ではスプーティ同様に、シャーリプトラやシャクラも何度かひらめきの役割を担っている。例えば、シャーリプトラによるひらめきも仏の威神力によるものであるが、彼が語るのは譬喩である。(Aṣṭa, p.107.)
- ⑤⑭ SP, p. 71, ll. 17-21: te vyaṃ bhagavann etarhi bhagavato 'ntikāc chrāvākāṇām api vyākaraṇam anuttarāyām samyaksambodhau bhavatīti śrutvā āścaryādbhutaprāptā mahālabhaprāptāḥ smaḥ / bhagavann adya sahasaivemam evaṃrūpaṃ aśrutapūrvam tathāgata-ghoṣam śrutvā mahāratnapratilabdhas ca smaḥ / bhagavan aprameyaratnapratilabdhas ca smaḥ / bhagavan amārgitam aparyeṣṭam acintitam aprārthitam cāsmābhir bhagavann idam evaṃrūpaṃ mahāratnam pratilabdham / pratibhāti no bhagavan, pratibhāti naḥ sugata /.